

美術が育む子どもの創造的人間教育

Creative human education for children nurtured by art

大場 六夫
Mutsuo OHBA

要旨 (Abstract)

子どもが描いた絵は、その時の心の表れであると言われている。そこで本稿では、子どもが描いた絵の理解に着目した。

何を描いているのか理解できないから下手だと断言できるのか。大人の目線で評価をしているではなかろうか。ここでいう大人の目線評価とは、線が綺麗に描かれている。着色がはみ出さずできている。ムラなく着色ができているといった内容である。

教育現場に於いても、モチーフに忠実に仕上げた作品が評価される。そのことから、絵を上手く描くことができれば、評価は下がり、劣等感を感じる。

子どもが描いた絵が感性、感覚を訴えているかを見極めることから、創造する、行動する思考を伸ばせるのか、実例を紹介しながら一考察する。

尚、ここでの紹介（使用している）する画像は、すべて本研究ノート掲載に対し、承諾を得ている。

キーワード：表現、子ども、アート、人間教育

I. 保育園での活動

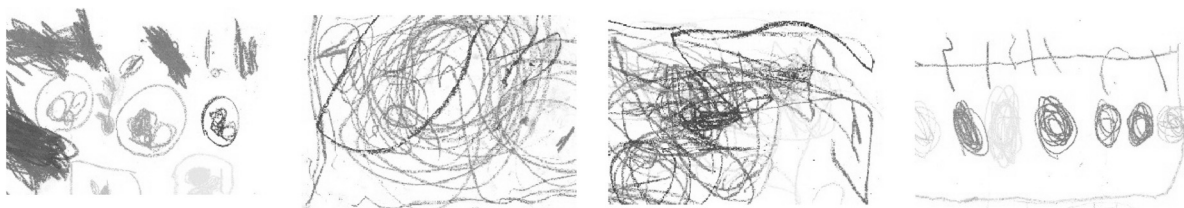
保育園で5歳児にクレヨンで思うが儘（らくがきの）絵を描かせた。

子どもたちは、絵を描きながら様々な空想を描いた。中には「爆発だぁ」と岡本太郎同様の言葉を発した子どもが多く観られた。

また、鼻歌を歌いながら絵を描いている子どももいた。

絵を描くことが楽しいといった気持ちから、描き上げると、友達に見せたいという考えから描いた絵を持って席から離れ、教室内を走り回っていた。指導をしている私自身にも見せて来る子どもいた。そのような状況下、終始、笑顔が絶えなかった。また、自身の身体にクレヨンを塗りたくって大笑いして、担任に叱られる子どももいた。





考察

何の概念もなく、自由に表現できる。また、この年代で観られる行為で、何を描こうかと考えて描くのではなく、描くことによって感じるといった行為である。そのことから、子どもは絵を描くことにより親をはじめとした身近な人に思いを伝えようとしている。

子どもは、絵を描き上げると見せる行動を起こす。それは、表現したものを伝えるといった行為の表れである。ボディ・ペインティングは、自分というものと外の世界を一体化する行為だと考えられる。

II. 学童での活動

学童の小学1年、2年生対象としたアートの活動は、ランダムな線を引き、クレヨンで着色する絵を描かせた。

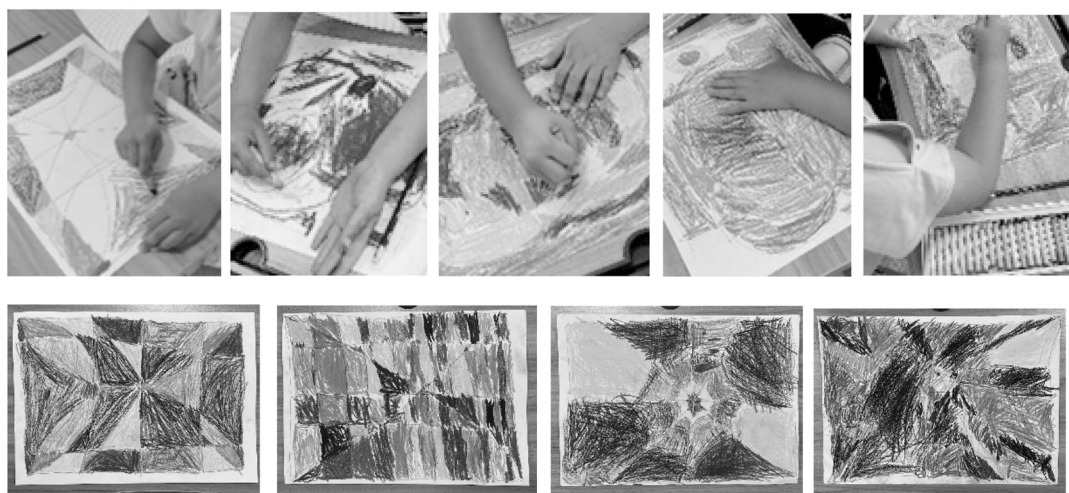
下書き（線をランダムに引く）段階では、しっかりとした線が描けていた。ところが、当初だけ枠内に着色ができたが、瞬く間に枠からはみ出すようになった。そのことが引き金となって大人目線では、乱雑極まりない作風へと変貌して行った。

ここでの仕上がった作品に対し、黒色を着色するケースが目を引いた。

表現行為以外で、子どもたちが、気づいたことは、クレヨンは、持った指の力が強すぎると折れてしまい、悲しい思いをした。また、机の上が、乱雑になっているとクレヨンが、机から落ちて、綺麗に揃っていたのがバラバラになり、やはり悲しい思いをした。

このことから、クレヨンを折らないためといった行為が、モノを大切にするという意識が芽生えた。

クレヨンが、机の上から落ちてバラバラになることを知って、机の上は常に整理整頓をしていないといけないと思えるようになった。



考察

この学童での活動も保育園児と同様の結果が生まれた。何を描こうかといった思考より、先に手が動いていた。自分で無意識に近い状態で描いた線、何の計画もない。思いつきで24色の中から選んだクレヨンで着色するこ

とからイメージを膨らませ、配色を含めた思考が楽しくて仕方ない様子で表現している。

これら一連の行為は決して思考が覚束ない訳でなく、周りの人（指導者を含め）から注意や規則を言われなくて、自身の心の中にあるものを引き出している。

今回、この作品を観て黒色で着色する子どもが多くあった。筆者は、これまでアートの活動を数多く行って来たが、黒色を多く使うといったケースは、ほとんど観られなかった。

そのことで学童の先生に確認したところ、アニメ「鬼滅の刃」の影響だろうということだった。アニメがこのような幼少の子どもにまで影響を及ぼすとは、思いもなかった。

Ⅲ. 小学5年6年生対象のらくがき遊び

小学5年6年生対象に寺の境内で、らくがき遊びを実施した。

大きな模造紙とクレヨンを用意した。そうしてらくがきを始めたところ、参加した子どもたちは、口々に「何を描けばよいのですか」という意見が飛び交った。そこで「全く自由なので好きなものを描けばよい」と提案した。ところが、誰一人手が動かない。そこで寺の住職が「思いつくものを描いたらいい」と声かけをしていただけた。そのようなアドバイスを与えても描くことができなかった。

仕方なく、「自分の身の回りにあるものを描いてみては」ということになり、その日の仕上がった絵は、境内にある石灯籠や、障子の隙間から見える観音像などであった。

住職は、この様子を観て「これじゃ、らくがきではなく、写生会になった」と言われた。



考察

このらくがき遊びに関して、これまで保育園、学童での活動で観られた子どもの意識とは真逆になった。

自由に描く。好きなように描く。

幼少の頃は、自由にらくがきができた。そうして描いた絵に対し、親たちが、「きれいに描けたね」と評価を下す。学年が上がるにつれて、描いた絵が評価されなければならないと考えるようになる。その考えが、自由な絵を描けなくしていると思われる。

この催し物に参加し、作品が仕上がっても、子どもたちに笑顔は観られなかった。

Ⅳ. イオンモールでのアートのイベント

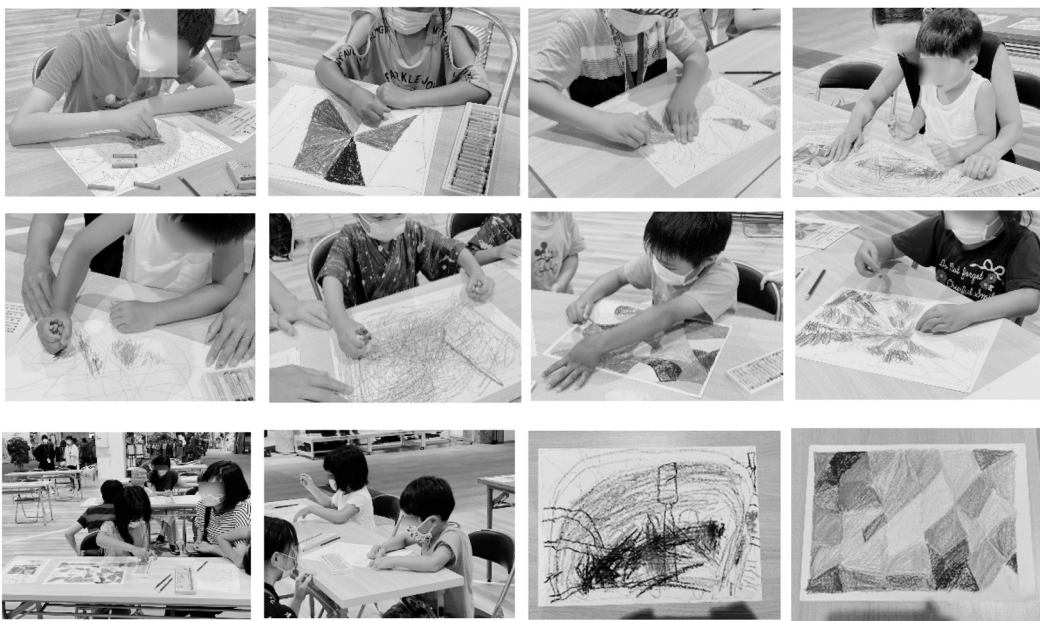
先日、7月9日に開催した、イオンモール登美ヶ丘店でのアートの活動を行った様子である。

当日参加者は54名で年齢は2歳から13歳（20歳以上は省いた）だった。

その参加した子どもに目を向けてみると、これまでの事例では、授業の一環として意思に関係なく強制的に絵を描いた。ところがこのイオンモールでの活動は、催事ということもあって強制的にといった事情ではなく、自らの意思で参加し、絵を描いた。

描いている様子は、みんなが笑顔になっていた。描く行為に対し、積極的である。そして見る限り挑戦的であった。それは両手に5本ずつクレヨンを持って絵を描くといった姿が観られた。

それらは、絵を描く行為と創造とが同時に心の中が働いているようだった。



V. 総括

ここまで、保育園、学童、小学5年、6年生、そして7月に開催したイオンモールでのイベントと、さまざまな場面で、子どもたちの絵に対する見方、そして子どもたちの成長につながるアートの必要性を考察してきた。

その結果、幼少の頃、子どもの絵は、手を動かすと同時にイメージや思考が働いて絵を描いている。そして絵を描くという行為また、表現することを楽しんでいる。

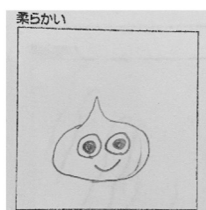
このことについて磯部錦司は、次のように述べている。

描きながらイメージを広げていく様子や、イメージから形を生み出していく様子、経験や想像したことをもとに描きながらイメージを色や形にしていく様子は、視覚的思考の過程だといえます。子どもたちは、絵の中で、色や形を「見ること」から思考を始め、思考することによって色や形を作り出す行為を生み出し、その連続した営みの中で絵は生まれていきます。子どもは、「見ること」を通し「描きながら思考している」のであり、子どもは、このような「描くという思考の過程」を通し、見方や感じ方、考え方を広げているのです。^{注1)}

子どもたちに優れた感性を抱き、豊かな心を抱き成長を求める大人や教育者。ところが、完成主義を求めることから偏った教育のシステムが存在している。

また、昨今、YouTube、インターネット、ゲームといった媒体が子どもたちの生活の一部となりつつあるがために受動態に陥り、イメージを膨らますといったことが欠如していると思われる。

その結果、前述した寺の境内でのらくがき遊びでほぼ全員が、「何を描いていいかわからない」といった意見が出たのはその表れだと考えられる。また、このような現象も出ている。



この作品はデザイナーを目指す学生（18歳）が描いたイメージ画。スマートフォンを観ながら描いた。スマートフォンを見ながら描くことは決して悪くはないが、「柔らかい」のイメージが「スライム」では、創作活動からかけ離れていると筆者は考える。

そこで7月にイオンモール登美ヶ丘店で、奈良学園大学人間教育学部の学生5名と組んでアートのイベントを行った。

注1) 磯部錦司『子どもが絵を描くとき』（2006）p21 一藝社

協力してくれた学生は、すべて筆者が「美術の理解」という担当科目を受講している学生である。その「美術の理解」の授業での、「美術とは」、絵の技術向上のためでなく、人間形成につながるといったことを、実践を通して知識として学ぶ。

イベント活動に参加してみようと思った学生の意見は、ほぼ同様に「美術の理解の授業を受けていて、実際、子どもたちがどのような絵を描くのか、描いている様子が観たいと思ったから」だった。

また、実際、活動をしたことで気づいたことは「子どもの豊かな表現力の驚いた」「大人では考えつかない構図や配色が気になった」などである。

そして将来、教員を目指す自分にとってこの活動は全員が楽しい思いをすることができ、「教員として働く上で大いに役立つと思う」と答えてくれた。

イベント当日は、学生たちに昼休憩以外、休憩がとれないという盛況だった。(子ども一人が作品を仕上げるのに費やす時間がおおよそ4~60分位)。

このイベントに参加してのアンケートによる結果内容は、

■今回参加して 楽しかった 100%。 楽しくなかった 0%。

■学校での図画工作の授業について尋ねてみた結果は

好き 78%。 どちらでもない 16%。 嫌い 6%。

■今後、このようなイベントが開催されるようになったら、参加するが 100%だった。

今回、イベントに参加して、絵を描いている我が子の様子や感想を、保護者目線での意見。

- ・達成感が凄いと思った。
- ・とても嬉しい気持ちで描いていた。
- ・楽しく描いている姿を見て、絵を描くことが好きなんだなぁと感じた。
- ・積極的に活動できた。
- ・描き終えてから、自身が描いた絵の説明をいっぱい話してくれた。
- ・我が子の才能を知ることができた。

VI. イベントのまとめ

イベントに参加してくれた学生は、実際に子どもと触れ合うことや、保護者との会話から、指導者として多くの経験、学びを感じたと思う。特に子どもに何ら概念を与えないで、作品を仕上げさせるのに、苦心したと思えるが、そのことから「美術の理解」が得られたと思う。

イベントの参加してくれた子どもは、学校では学べないことや、普段では体験できないことをやり遂げたという達成感や、自分自身の思いを自らの考え、やり方で作品を仕上げたことから、主体性や自己肯定感が上がったと思える。

アンケートで着目すべきことがある。

学校の図画工作の授業は嫌いだが、今回のイベントは楽しかったという意見があった。この意見は解釈をどう捉えるかで美術教育の本質が見いだされる。

なぜなら、美術作品を仕上げることには変わらないが、なぜ、学校での図画工作は嫌いだが、どうしてイベントでのアートの活動は楽しく思えたのか。

図画工作の授業の場合、教育者は、子どもたちにアートを通して、豊かな心を抱けるよう指導を心がけているようだが、作品の仕上がり、優劣を招く結果を子どもたちに押し付けている。そういった行為が子どもは、図画工

作の授業が嫌いになる。

子どもの心は常に、縦横無尽に広がる限りない想像で満ち溢れている。そのあたりが今回、イベントでは、子ども自身の心の中にあるものが、表現できたことで楽しい気持ちになれたのだと考えられる。

VII. おわりに

美術教育が子どもの心を育てる。

大人は、子どもと寄り添い、子どもの世界観を押し付けることなく、観ることが重要である。

そのことから美術は、子どもを観る上で、とても大切な役割を果たしているといえる。

美術を通しての創造力こそ、豊かな心を抱き、生きる喜びを感じることになる。

子どもが描いた絵の見方について、岡田 清が「幼児の絵と教育」にて次のように述べている。

幼児がニワトリの絵を描いて、おしりの方へ二本足を描きました。それから胸の方へまた二本描きました。見ていた若い母親はびっくりして「トリに四本なんて足がありますか。早く消して二本にしてください。」と言いました。子どもは「いや」とはっきり言いました。

「ニワトリの足は何本かあなたは知ってるでしょう。」「二本だ」「そんならあなたは間違えて描いているじゃないの。二本にしてください。」しかし子どもは首を振って「いや」と言いました。

さて一体私たちは、母親の方に味方したらいいのか、子どもに付いたらよいのか、どちらなのでしょう。

ニワトリの足は二本です。その意味から母親に間違いはありません。しかも子どもは四本でいいと言うのです。

この子は無意識ではあるが安定感を現したかったのです。四本にしないと何かしら心に安心できなかったもので四本にしたのでしょう。

ここで母親と子どもとは、全く違う立場にいることがわかります。母親は知識によって子どもに二本にせよと言う。子どもは感覚的に四本なくてはいけないと思う。知識で描いているのではないのです。

さてここまで解説してくると、答えはおのずから決まります。絵とは、知識をみがくものではなくて、生きる幸^{さち}を希^{ねが}い、感覚感情をもとにして、心の勉強に重さのかかる仕事である限り、子どもの絵を知識で見るのは間違っています。^{注2)}

大人目線で観て不自然な表現にしても、それを修正するのではなく、なぜそのようなになったのかを理解し、発展させることが創造力を伸ばし、心の成長に繋がると考えられる。

それは普段の生活の中での躰においても同様である。叱ることは、否定することではなく、過ちを理解させることだといえる。否定するとその行為自体がその場でとどまる。無限に体験することは、限りない創造力を育む。

文献 (References)

- ・磯部錦司『子どもが絵を描くとき』(2006) p21 一藝社
- ・岡田 清『幼児の絵と教育』(1977) p108 創元社

注2) 岡田清『幼児の絵と教育』(1977) p108 創元社